

積極的なかわりを生む外国語活動 ーグループ・アプローチとリアクションのスキルの導入を通してー

田辺市立富里小学校

教諭 小 阪 陽 子

【要旨】

小学校外国語活動に、グループ・アプローチのショートエクササイズ（ウォーミングアップ活動）とリアクションのスキル（あいづちやうなずき等）を導入し、コミュニケーションのための技能を身に付けさせる授業づくりを行った。ウォーミングアップ活動により、児童の間に「受け入れてもらえる」という安心感が生まれ、自分の思いや考えを表現することへの抵抗感を少なくすることができた。また、リアクションのスキルを身に付けることにより、双方向のやりとりが成立するようになり、児童にコミュニケーションの楽しさを実感させることができた。

【キーワード】

外国語活動 コミュニケーション グループ・アプローチ ウォーミングアップ活動 リアクションのスキル

1 研究のねらい

小学校学習指導要領における外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」（※1）ことである。そのため、授業にはコミュニケーション活動が多く設定されている。

当センターの小学校外国語活動研修講座（2012年6月実施）を受講した教員57名にアンケート調査を実施したところ、約90%の受講者が「普段あまり話をしない児童同士も外国語活動では進んで話をしている」と答えた。このことから、外国語活動は普段話をしない児童同士でもコミュニケーションを図ることができる良い機会となっていることがうかがえる。

所属校で昨年度担当した授業を振り返ると、外国語活動は、多様な教材を活用するなどの指導の工夫により、児童にとって楽しい時間となっていた。しかしその一方で、コミュニケーション活動においては、友達に対し自分の思いや考えを話すことに抵抗を感じていたり、インタビュー活動などでは、答えを聞き取ることだけに集中し、コミュニケーションを楽しむことができていなかったりする場面があった。同様の傾向は前述のアンケート調査の回答にも見られており、コミュニケーションの場面は児童にとってやや楽しみが少ない部分だと言える。しかし、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成は外国語活動の重要な柱の一つである。そのため、児童が自分の思いや考えを進んで表現し、その楽しさを実感できるようにする必要がある。

そこで、研究のねらいを「外国語活動において、コミュニケーションのための技能を児童に身に付けさせることによって、自分の思いや考えを表現することへの抵抗感を少なくし、コミュニケーションの楽しさを実感させる」とした。

2 研究の内容

本研究では、ねらいを達成するために、授業にグループ・アプローチのショートエクササイズ（ウォーミングアップ活動）とリアクションのスキル（あいづちやうなずき等）を導入した。

（1）グループ・アプローチのショートエクササイズ（ウォーミングアップ活動）

外国語活動にはコミュニケーション活動が多く取り入れられている。児童がそれらの活動において、失敗を恐れず進んで自分の思いや考えを表現するためには、お互いに信頼感をも

ち、安心して活動できることが重要である。そこで、ペアやグループで集団の課題に合った活動を行いながら、児童が他者と人間関係を深めることのできるグループ・アプローチを授業に導入する。外国語活動にグループ・アプローチを導入した佐藤（2011）は、「児童の感想から、人と関わることの良さを実感でき、人と関わる意欲をもてた様子がうかがえた」（※2）と述べている。本研究では、グループ・アプローチを導入することで自分の思いや考えを表現することへの抵抗感を少なくすることを目指す。

授業では、毎時間のはじめの10分間を利用し、英語を用いたグループ・アプローチのショートエクササイズ（主に構成的グループ・エンカウターの簡便形）を実施する。ショートエクササイズは短時間で行うことができるので、「児童の集中力が持続しやすい」、「授業の流れの一部として利用しやすい」、また、一つのテーマが一つの場面を通して追求されるので、「テーマを明確にできる」等の利点がある。

（2）リアクションのスキル（あいづちやうなずき等）

コミュニケーション活動では、聞き手があいづちやうなずき等を返すことで、言い放しの一方向のやりとりを双方向のやりとりにすることができる。聞き手があいづちやうなずきなどを返すと、話し手は「共感してもらった」、「伝わった」と感じることができ、聞き手は「相手の言っていることをよく聞こう」、相手の言ったことに対して「自分の思いも伝えよう」と意識することができる。そこで、コミュニケーションの技能として「あいづち」「共感」「賞賛」などを表す英語表現と、「うなずき」「ジェスチャー」などを併せてリアクションのスキルとし、意図的に指導する。

外国語活動にあいづちなどの「つなぎ言葉」を導入した松川（2011）は、「『つなぎ言葉』を使うことによって、コミュニケーションに対する態度が積極的になりつつある」（※3）と述べている。本研究では、リアクションのスキルを導入することで、児童に英語を使ったコミュニケーションの楽しさを実感させる。

3 検証授業

（1）検証授業実施状況

次の通り2校で検証授業を実施した。所属校（A小学校）は、1学級当たりの児童数が少ないため、近隣のB小学校にも協力を得て実施した。

実施校	A小学校	B小学校
実施時期	11月	10月下旬から11月中旬
児童数	7名	22名
単元	『Hi, friends! 2』 Lesson 6, Lesson 8	『Hi, friends! 2』 Lesson 6
授業時数	8時間	4時間

（2）検証方法

以下を基に、本研究における成果等を考察する。

ア 行動観察

教室に設置した2台のビデオで記録した映像と音声を基に、それぞれの児童の授業での発言と行動の変化を分析した。

イ ふりかえりカード

本研究では、「ふりかえりカード」に、①ウォーミングアップ活動に関する部分と②授業の展開部分に関する部分を設定した（図1）。

①の部分は、活動が終わった直後に児童に記入させた。ここでは児童が楽しく活動に参加できたか、気持ちよく活動ができたかを調査する質問を4件法で設定し、結果についてはリカート・スケール（注）を用いて分析した。さらに、活動の中で児童が気付いたことを記述する質問項目を設定した。

注 リカート・スケールは、「よくできた」4点、「できた」3点、「あまりできなかった」2点、「全くできなかった」1点とし、各項目の平均点を算出した。本研究では、全体の80%に当たるリカート・スケールの平均値3.2を「児童が概ね活動の目的を達成できた」と判断する基準とした。

②の部分は、児童が授業の展開部分での自分の学びを振り返るための質問である。質問項目2では、リアクションのスキルに気を付けたかどうか、質問項目4では、ペアやグループでの活動が気持ちよくできたかどうかを4件法で問う。質問項目5では、授業の中で頑張ったことや次時で頑張りたいことを記述させる。そうすることで、指導者は児童にコミュニケーションに対する姿勢を振り返らせたり、児童の意欲の高まりをとらえたりする。

ウ 事前・事後アンケート

検証授業実施前と実施後にアンケート調査を行った。外国語活動への取組の姿勢や、英語を話す時や聞く時に気を付けていることについて、児童が4件法及び記述形式で回答した(表1、2)。

エ 学級担任のアンケート等

検証授業を参観した学級担任から、授業中の児童の様子について4件法及び記述形式で回答を得た。また、外国語活動担当者への聞き取りも行った。

表1 事前アンケート質問事項

外国語活動について ①授業は好きですか。 ②一番好きな活動は何ですか。 ③グループで活動をする時教え合ったり、力を合わせたりしている。 友達に英語を話す時に気を付けていることについて ④相手の表情を見て話している。 ⑤自分の思いや考えを話している。 ⑥相手の様子に気を付けて話している。 ⑦その他に気を付けていることがあれば書いてください。 友達の英語を聞く時に気を付けていることについて ⑧相手の表情を見て聞いている。 ⑨うなずいたりあいづちをうったりして聞いている。 ⑩相手の話の内容を想像しながら聞いている。 ⑪その他に気を付けていることがあれば書いてください。

図1 ふりかえりカード例

表2 事後アンケート質問事項

外国語活動について ①授業は好きですか。 ②一番好きな活動は何ですか。 ③グループで活動をする時教え合ったり、力を合わせたりしている。 ④Lesson 6と8の授業で、一番好きだった活動は何ですか。 ⑤Lesson 6と8の授業で、楽しかったことは何ですか。 ⑥Lesson 6と8の授業で、がんばったことは何ですか。 友達に英語を話す時に気を付けたことについて ⑦相手の表情を見て話している。 ⑧自分の思いや考えを話している。 ⑨相手の様子に気を付けて話している。 ⑩その他に気を付けたことを書いてください。 友達の英語を聞く時に気を付けたことについて ⑪相手の表情を見て聞いている。 ⑫うなずいたりあいづちをうったりして聞いている。 ⑬相手の話の内容を想像しながら聞いている。 ⑭その他に気を付けたことを書いてください。
--

4 ウォーミングアップ活動について

(1) 活動のプログラムの選定と作成について

グループ・アプローチのショートエクササイズは、通常①インストラクション、②エクササイズ、③シェアリング、④まとめの流れを基本として行う。

①インストラクションでは、指導者が活動の説明を行うとともに、目的意識をもたせるため、その活動のめあてを提示する。

②エクササイズでは、児童が集団体験を通してマナーやルールに気付き、感情を共有し、

仲間意識を高める。

③シェアリングでは、児童が感じたことや学んだこと、気付いたことを話す。そうすることで、それぞれの児童が活動で学んだことを意識化することができる。

④まとめでは、指導者が活動の意義や目的を確認したり、学んだことを今後どう生かしていくかや、グループや個人について感じたことを評価したりする。

本研究では、③のシェアリングの場面で「ふりかえりカード」を活用した。「ふりかえりカード」に記述させることで、児童は短時間で振り返りを行うことができ、指導者は④のまとめの場面でその記述を活用することができる。また、「ふりかえりカード」をポートフォリオとして残すこともできる。

ウォーミングアップ活動のプログラムを設定する際には、以下の三点に留意した。

一点目は、集団の課題にあった活動を設定することである。本研究では、先に述べた「自分のことを話すことに抵抗を感じている」という現状を改善するため、児童の素直に友達とかかわりたいという気持ちを喚起させられるものを取り入れた。

二点目は、児童が言葉を使って行う活動を設定することである。言葉を使って活動を行うことで、どうすれば人に分かりやすく伝えたり、話をしっかり聞いたりできるのかという効果的なコミュニケーションの方法に気付くことができる。さらに、相手の答えを自分のことと比較したり、相手の考えに共感したりする体験を通して、相手に対する理解が深まり、コミュニケーションをとることの大切さを知ることができると思う。

三点目は、できるだけ授業にかかわる英語を使った活動を設定することである。そうすることで、児童がその表現を聞いたり話したりすることに慣れ、その後の英語でのコミュニケーション活動に円滑に取り組むことができると思う。

以上の留意点を踏まえ、実際の授業では、ウォーミングアップ活動として表3及び表4のプログラムを実施した。なお、紙面の都合上、活動の詳細は、Lesson 6で行ったものについてのみ示す。

それぞれの活動は、オリジナルのグループ・アプローチのショートエクササイズに準じて、めあてとねらいを設定し、活動内容については外国語活動で活用するために、英語を用いた内容に修正した。

例えば Lesson 6 の第2時の「買い物に行こうよ」では、「猛獣狩りに行こうよ」という仲間づくりの活動を英語にアレンジした。児童の動きや、指導者の指示に応じた人数でグループを作るという点はオリジナルと同様であるが、猛獣の代わりに買い物の対象となる品物を扱うこととし、また、作るべきグループの人数を指示する際には、猛獣の名前の文字数の代わりに単語に含まれる「a」の文字の位置で示すように修正した。

表3 『Hi, friends! 2』 Lesson 6 で実施したウォーミングアップ活動

時	第1時	第2時	第3時	第4時
活動名	ナンバーコール	買い物に行こうよ	WANTED この人を探せ	カラーで相手を探そう
オリジナルの活動	「ご指名です」 國分 (1996)	「猛獣狩りに行こうよ」 河村・品田・藤村 (2007)	「WANTED この人を探せ」 八巻 (2001)	「カラーで相手を探そう」 國分 (2001)
めあて	みんなで協力して、ナンバーコールを長く続けよう	いろんな友達と仲間づくりをしよう	友達のことについて知っているか確かめよう	大きな声を出して同じカラーの仲間づくりをしよう
ねらい	協力し合って番号をコールする中で、協調性を高める。	誰とでも仲間づくりをする。	友達のことを知り、お互いの親近感を深める。	友達のことを知り、お互いの親近感を深める。
活動内容	- 数字を練習する。 - グループ内で番号を割り当てる。 4拍子のリズムのとり方を練習する。(1拍目、2拍目：全員で拍手、3拍目：左手の親指を立てて左へ倒す、4拍目：右手の親指を立てて右へ倒す。) - 自分の番号をコールされた人が3拍目で自分の番号、4拍目で他の	歩き回りながら指導者の真似をして歌を歌う。 Let's go shopping ! (歩き回りながら右手を挙げる) Let's go shopping ! (歩き回りながら左手を挙げる) I like shopping ! (歩き回りながら右手を胸に当てる) I have much money ! (歩き回りながら左手を胸に当てる) Look! Look! (立ち止まり空に向けて指を指す) 買いたいものを言う	- ワークシートの3つのことができる人を予想する。 - 表現を練習する Can you ...? Yes, I can./No, I can't. - 予想をした人に表現を使って質問をし、合っていたらサインをもらう。(予想が外れても他の友達に尋ね、条件に合えばサイン	- 色の言い方を練習する。 1人1枚付箋を取り、そこに書かれた自分の色を知る。 - 一斉に自分の色を言って、同じ色の付箋を持っている相手を探す。 - 相手が見つければタッチをしてペア(グループ)になって座る。相手が見つかるまで続け

活動内容	人の番号を言う。 ・リズムをとりながらグループ内で数字をリレーしていく。コールを忘れたり、間違えたりするとやり直す。 ・グループになり、代表チームが見本を見せる。 ・一斉にやってみる。 ・グループで、どうすれば長く続けられるかを考える。 ・考えたことを生かしてもう一度やってみる。	・歌の最後に絵カードで示されたものの名前を言う。 ・その単語の綴りから「a」という文字を探し出し、何番目に「a」があるか数えてその人数のグループを作る。(Peachなら3番目なので3人組) ・繰り返し活動を行う。	をもらう。) ・サインをもらった人数を書く。 ・質問の表現を一斉に言い、条件に合う児童は“Yes, I can.”と言いながら立つ。インタビューでサインをもらえていない児童は、自分でその条件に合った人の名前を書く。	る。 ・相手（仲間）とその色が好きかどうかを話し合う。(“I like <色の名前>.” “I don’t like <色の名前>.”と言った後に、「その理由は…です。」と言う。)
------	---	--	--	---

表4 『Hi, friends! 2』 Lesson 8 で実施したウォーミングアップ活動

時	第1時	第2時	第3時	第4時
活動名	この指とまれ	はい、ポーズ	なんでもバスケット	友達ビンゴ
オリジナルの活動	「この指とまれ」 國分 (1996)	「はい、ポーズ」 八巻 (2001)	「なんでもバスケット」 八巻 (2001)	「友達ビンゴ」 八巻 (2001)
めあて	同じものが好きな仲間を見つけよう。	自分のポーズや人のポーズを楽しもう。	自分と同じものが好きな人を知ろう。	自分の好きなことを確かめ、同じことが好きな友達のことを知ろう。
ねらい	自分と似た好みをもつ友達や、自分と好みの違う友達の存在を知り、自分や相手を肯定的に受け止める体験を通してお互いの良さに気付く。	自分なりに考えたポーズを真似し合う。その後、何のポーズかを説明し、納得し合ったり、友達のポーズをとることを楽しんだりする。	自分と同じ趣味や嗜好の友達がいることを知り、新しい友達の輪を広げる。	自分が好きなものを確かめたり、同じものが好きな友達のことを知り、親しみをもったりする。

(2) 授業の結果

ア 行動観察から

各授業で見られた児童の特徴的な様子を以下に列記する。

- ・第2時の「買い物に行こうよ」では、全体的に児童は遠慮がちだったが、第3時の「WANTED」では男女分け隔てなく“Can you …?”の表現を使ってできることを尋ね合っていた。また、第4時の「カラーで相手を探そう」や第5時の「この指とまれ」は、体が触れることが必要な活動であったが、児童は抵抗なく取り組んでいた。
- ・検証授業開始当初はペアやグループでの活動の際、一人になりがちな児童や、相手によって態度を変えたり避けたりする児童がいた。しかし、ウォーミングアップ活動でお互いがかかわる機会が増すにつれ、これらの児童も少しずつ自然に声を掛けたり、分け隔てなくコミュニケーションをとったりすることができるようになった。
- ・気分がむらがあるため、友達とうまくかかわれなかったり、日によって授業に意欲的に取り組めなかったりする配慮を要する児童についても、ウォーミングアップ活動で友達に声を掛けてもらったり、一緒に活動をしたりしていくうちに徐々に前向きになり、授業の展開部分にも意欲的に取り組むことができるようになった。回数を重ねるにつれ、その日の気分で授業への取組が左右されることが少なくなった。
- ・第3時頃になると授業の前に「今日はどんなウォーミングアップ活動をするのか」と児童が尋ねるようになった。活動を楽しみにしている様子が感じられた。
- ・「ナンバーコール」や「買い物に行こうよ」などの協力し合わなければならない活動では、普段はかかわり合うことが少ない児童が、楽しそうにグループ活動に取り組む様子が見られた。
- ・活動ではリズムに合わせて体を動かしながら英語を使う場面を設定した。リズムに合わせて体を動かすことで、楽しみながら英語表現に慣れ、大きな声で自信をもって使えるようになった。

イ ふりかえりカードから

90%以上の児童が毎時間のウォーミングアップ活動が「楽しくできた」、「気持ちよくできた」と答えた。児童は概ねすべてのウォーミングアップ活動に楽しく取り組んでいたことが分かる。否定的な回答をした約10%の児童に関しては、人間関係に課題があっ

たり、人とかかわることに対して困難を感じていたりしたことが原因であった。これらの児童の回答状況は時間を追うごとに良くなっていった。

活動して思ったことや気付いたことについての自由記述欄には、以下の感想が得られた。

- ・みんなで活動できるととても楽しいと思った。
- ・仲間作りをする時は、協力し合ったり、ルールを守ったりすることが大切だと思った。
- ・いつも遊んでいる子だけでなく他の子とも仲間になれた。
- ・友達の好きなものなどがもっと知れたからいろんなことを知りたいと思った。
- ・もっと自分から話しかけたい。
- ・もっと（活動を）してみたりしてふれあいたい。

ウ アンケート結果から

事前と事後のアンケート（図2）において「グループで活動をする時教え合ったり、力を合わせたりしている」と答える児童が増加した。これは、ウォーミングアップ活動で人と力を合わせて課題を解決する活動を行ったからであると考えられる。

事後アンケートでの、授業で楽しかったことやがんばったことについての自由記述欄には、以下の感想が得られた。

- ・グループでの活動で協力することをがんばった。
- ・楽しく協力して活動することができた。
- ・笑顔で楽しく活動できた。

エ 学級担任のアンケートから

自由記述欄に以下の感想が得られた。

- ・「買い物に行こうよ」では、楽しそうに声を掛け合いグループ作りをした。
- ・「この指とまれ」（検証授業後半で実施）では、ほとんどの児童が積極的に人と関わりを持とうとしていた。
- ・何度もリピートすることで自信が持てるようになり、少しずつ声が出た。
- ・今までよりもミスを気にすることなく英語を話そうとする児童が増えた。

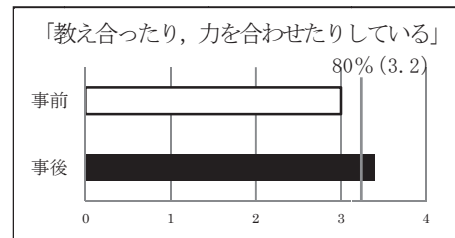


図2 事前・事後アンケートの結果

5 リアクションのスキルについて

(1) 授業の概要

本研究では、リアクションのスキルとして外国語活動のやりとりで活用できる簡単で身近な五つの表現、「I see.」「Really?」「Me, too.」「That's nice.」「That's too bad.」を選び、「ジェスチャー」「声の大きさ」「うなずき」「表情」「目線」と併せて指導した。これらは帯活動として毎時間指導した。

リアクションのスキルの指導には、図3の掲示物を用いた。掲示物の工夫は以下の五点である。

- ① あいづちをうつときの表情やジェスチャーが分かるよう、指導者の写真を使用した。
- ② 児童が使ってみたくなるよう、日常よく使う日本語の言い方を吹き出しの中に表示した。
- ③ 文字を手がかりにする児童もいるので、写真の下に英文を表示した。
- ④ 非言語のリアクションのスキルについては、「ジェスチャー」「声の大きさ」「うなずき」「表情」「目線」と書いたカードを作成した。
- ⑤ 児童がいつでもスキルを思い出し活用できるよう、常に黒板に掲示した。



図3 あいづちなどの掲示物

検証授業の第1時では、授業のはじめに指導者と代表児童とで挨拶のデモンストレーションを行い、児童に気持ちのよい挨拶のために大切なことを考えさせ、非言語コミュニケーションの大切さに気付かせた。その後、挨拶のやりとりの中で、相手の言葉（「I'm fine.」など）にどんな言葉を返したいかを考えさせ、「I see.」「Really?」「Me, too.」の三つのリアクションのスキルを提示した。

資料の学習指導案は、毎時の基本的な展開を示す例である。①挨拶では、最初にその時に使うリアクションのスキルの表現を十分に練習させ、挨拶の場面において“**How are you?**” “**I’m fine.**”などのやりとりの中でその表現を活用させた。②ウォーミングアップ活動の後、③展開では、コミュニケーション活動やスピーチなどの発表活動の中で活用させる場面を設けた。授業全体を通して、☆印で示した部分のように児童がスキルに触れる機会を多くもつようにした。また、指導者がモデルとなって、スキルの活用方法を示すようにした（下線部）。

第3時になると、児童は“I see.” “Really?” “Me, too.”の三つの表現に慣れてきたため、“That’s nice.” “That’s too bad.”の表現を加えた。これら五つの表現を①挨拶の場面で使うことに慣れてきた段階では、挨拶の後に“Can you …?” “Yes, I can. / No, I can’t.”を使ったやりとりを加えるなど、児童が相手の答えに対してリアクションのスキルを使いたくなるような場面を設定した。

資料 学習指導案（『Hi, Friends! 2』Lesson 8 第3時）

過程	児童の活動	指導者の活動	●指導上の留意点 ◎評価 ☆リアクションのスキルの使用場面
① 挨拶	挨拶をする。 ・リアクションのスキルを練習する。 ・ Hello. How are you? I’m … Can you …? (play tennis play table tennis play badminton) Yes, I can. / No, I can’t. 授業のスケジュールを知る。	・リアクションのスキルを練習させる。 ・歩き回って相手を探させ、尋ねたり、答えたりさせる。 ・授業のスケジュールを示す。	☆自信をもってスキルが使えるよう十分に練習をさせる。 ●リアクションのスキルを使っている児童をほめる。
② ウォーミングアップ活動	「なんでもバスケット」をする。 自分と同じものが好きな人を知ろう。 ・いすを持って教室の空いたところに移動し円になって座る。 ・オニを決める。 ・全員で“What do you like?”と尋ねる。オニは、4つの果物の中から1つ選び、“I like ….”と答える。同じ果物が好きな人が立ち上がり中央の輪に足をつき、別の席に座る。 ・全員で“What do you like?”と尋ねる。オニは、なんでも好きなものを、“I like ….”と答える。果物の場面と同様に同じものが好きな人が移動する。 ・振り返りをする。	・「なんでもバスケット」の説明をする。 フルーツバスケットを想起させながら説明をする。 ・指導者がオニとなり、例を示す。 ・オニが言ったものと同じものが好きな人を動かせる。 ・活動を通して感じたことを振り返らせる。	☆リアクションのスキルを利用することに気付かせる。 (自分と同じなら“Me, too.”と言いながら移動する。同じでなければ“Really?”などの反応を返す。) ●リアクションのスキルを使っている児童をほめる。
③ 展開	めあての確認をする。 つきたい職業についてたずねたり答えたりしよう。 【Let’s Chant】“What do you want to be?” ・音声教材を聞きながら言う。 「ステレオゲーム」をする。 ・代表児童は職業のカードを引く。 ・代表児童以外の児童は、“What do you want to be?”と尋ねる。 ・代表児童は引いたカードの職業を一斉に“I want to be a ….”と答える。 ・代表児童以外の児童は、代表児童が言った職業を当てる。 【Activity】3人の夢を知ろう ・3人の夢を予想する。 ・聞き取った答えを誌面に書く。	・音声を開かせながら一緒に言わせる。 ①指導者：質問、児童：答えのパート（ゆっくり） ②指導者：答え、児童：質問のパート（ゆっくり） ③指導者：答え、児童：質問のパート（ふつう） ・2～3人代表児童を選ぶ。 ・代表児童以外の児童に尋ねさせる。 ・代表児童に一斉に答えさせる。 ・3人の子どもたちの夢を推測させてから音声教材を聞かせる。 ・分かったことを空欄に書かせる。	●代表児童には声の大きさ、聞いている児童には耳を澄まして聞くことが大切だということに気付かせる。 ☆声の大きさや速さが重要であることを気付かせる。 ●指導者が3人の子どもの夢を聞いてリアクションのスキルを使った反応を返すモデルを示す。 ●最終の時間には自分も発表することを意識させる。

	【Let's Play】 友達に夢をインタビュー ・出会った友達に就きたい職業についてインタビューをし、名前と夢を誌面に書く。	・インタビューの仕方を説明する。 ・次時に自分の夢宣言をすることを告げる。	☆リアクションのスキルを利用するとコミュニケーションが楽しくなることに気付かせる。 ◎就きたい職業について尋ねたり答えたりしている。【慣れ親しみ】（行動観察 誌面点検）
④まとめ・挨拶	振り返りをする。 ・ふりかえりカードに記入する。 挨拶をする。 ・See you.	・ふりかえりカードに記入させる。 ・児童の英語を使おうとする態度などでよかったところをほめる。 ・次時までには発表活動の準備してくるよう伝える。 ・挨拶をする。	●就きたい職業について尋ねたり答えたりすることができたかを振り返らせる。 ●どのようなリアクションのスキルを使うことができたかを振り返らせる。

（２）授業の結果

ア 行動観察から

各授業でリアクションのスキルの活用について見られた児童の姿は、以下の通りである。

- ・慣れていない表現を言う際には、声が小さくなったり表現の言い方を片仮名でメモしたりする姿が見られた。
- ・第２時までは、黒板の掲示物を頼りに言う児童が多く、なかなか相手と目を合わせた表情を見たりしながら言うことは難しかった。
- ・第３時に表現を増やしたことで、児童がスキルを使う場面が増えた。またそれ以降、どちらの学校の児童もスキルを使うことに慣れ、授業全体を通して活発にスキルを使うようになった。
- ・第３時以降には、児童同士のコミュニケーションの場面だけでなく、指導者が言ったことに対しても、驚いた時には“Really?”、指示などを聞いて納得した時には“I see.”など状況に合った反応を返すことができるようになってきた。
- ・良いことを言っているのに“**That's too bad.**”と言ったりするなど、話の流れに合わないリアクションのスキルを使った際には、互いに指摘し合えるようになってきた。
- ・スピーチなどの発表活動では、発表をする際の工夫点を記述させた。多くの児童が目線やジェスチャーなどのリアクションのスキルを使うことを挙げた。
- ・第４時の発表活動では、話し手は原稿を読みながら発表したり、聞き手は話し手に対する評価カードを書こうとして相手を見ずに発表を聞いたりするなど、お互いに相手を意識することができていなかった。しかし、第８時での発表活動では、話し手は相手の様子を見ながら発表をしていた。そして聞き手が理解できていないと思ったら言い直したり、ジェスチャーを交えたりして何とかして伝えようとしていた。聞き手は発表者を見ながら聞き、あいづちをうつなど、話された内容に合った反応を返していた。

イ ふりかえりカードから

授業でがんばったことについての自由記述欄には、リアクションのスキルについて以下の感想が得られた。

- ・笑顔で話したり聞いたりした。
- ・ジェスチャーを恥ずかしがらずにした。
- ・大きい声で相手が聞き取りやすいように話した。
- ・前の時間よりもあいさつの時声を大きくできた。
- ・真剣に聞くことをがんばった。
- ・発表の時にスキルを多く使うようにすることをがんばった。

これらのリアクションのスキルに関する感想は、最初は少なかったが、回数を重ねるにつれ徐々に増えていった。児童は意識的に会話の中にリアクションのスキルを取り入れているように見えた。

ウォーミングアップ活動で思ったことや気付いたことを記述する欄には、以下のリアクションのスキルに関する記述が得られた。

- ・リアクションのスキルを使うことで楽しくできることがわかった。
- ・知らないうちにリアクションのスキル（うなずき・ジェスチャー・目線など）を使っていた。
- ・ジェスチャーはいがいと使いやすかった。
- ・はっきりしゃべることも大事だけど、しっかり聞くことも大事。

ウ 事前・事後アンケート結果から

事前と事後のアンケート結果(図4)を比べると、「相手の表情を見て話している」、「相手の表情を見て聞いている」など相手を意識して話したり聞いたりしていることに関する項目の数値が上昇した。

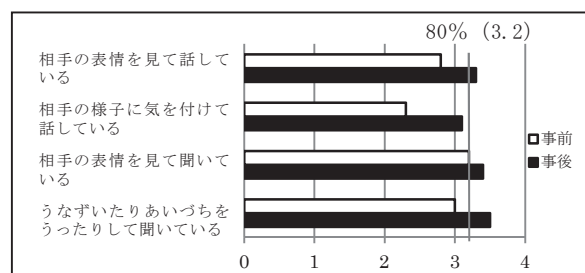


図4 事前・事後アンケートの結果

同じ質問に「あまりあてはまらない」

と回答した児童についても、自由記述の欄には「大きな声ではっきりと言った」、「うなづくことに気を付けた」などの記述が見られ、相手を意識して話したり聞いたりしている様子がうかがえた。

話す時に気を付けたことや聞く時に気を付けたことを自由記述で尋ねたところ、事前アンケートでは、「ゆっくり話す」、「分からなかったら質問をする」などと答えることができた児童は3分の1程度に過ぎなかった。しかし事後アンケートでは、ほぼすべての児童がリアクションのスキルについて記述していた。

エ 学級担任のアンケート等から

自由記述欄や外国語活動担当教員からの聞き取りにより以下の感想が得られた。

- ・リアクションのスキルに慣れてきたようで、間違いを気にせず、リアクションのスキルを活用できた。
- ・ALTとの授業や日常の会話の中で、児童は“Me, too.” “Really?”などの表現を楽しみながら活用していた。

6 成果と課題

(1) 成果

ア ウォーミングアップ活動について

ウォーミングアップ活動を通して、児童は普段あまり話をしない相手にも少しずつ自分から声を掛けられるようになった。声を掛け合い、かかわりをもつ中で、児童に自分のことを受け入れてもらえるという安心感が生まれ、児童同士や指導者との心理的な距離が徐々に縮まった。ウォーミングアップ活動を導入することは、児童が安心して自分の思いや考えを表現できる人間関係づくりをする上で有効であったと考える。

検証授業開始当初は、気分がむらがあり、友達とうまく関係がもてず、活動に積極的に参加することが難しい児童がいた。しかし、徐々に笑顔でやりとりをするようになった。それは、友達から声を掛けてもらったり、自分のことを友達に知ってもらったりすることで、人とかかわることが楽しいことだと気づき、人と関係をもつことへの抵抗が減り、気持ちよく人とかかわりをもとうとする姿勢が身に付いてきたからだと考える。また、自分から声を掛けることが難しい児童もいたが、周りの児童が積極的に声を掛けようとするようになったことで一緒に活動を楽しむことが多くなった。

イ リアクションのスキルについて

授業の中でリアクションのスキルを指導し、児童がスキルを使用する場面をできるだけ多く設定したことで、児童同士のやりとりが双方向になり、話し手と聞き手の双方がコミュニケーションをとることを楽しいと感じていた。

話し手はリアクションが返ってくことで「自分の話す内容を受け止めてもらえている」という安心感を得て、自信をもって自分のことを話していた。そして、聞き手は話し手の言葉に適切なリアクションを返そうと意欲的に話を聞き、表情豊かにリアクションを返していた。また、児童は話の流れに合わないリアクションが使われた時に、それを互いに指摘し合っていた。どうすればコミュニケーションを楽しむことができるか、気持ちのよいコミュニケーションの在り方を考える機会となった。

指導に当たっては、コミュニケーションの楽しさを実感させるために、児童が自信をもって英語の表現を使えるよう、十分にスキルに慣れさせ、コミュニケーションの成功

体験を積み重ねることが重要である。特に英語に苦手意識をもつ児童については、自信をもって活動に取り組めるよう、できるだけ丁寧にリピート練習をしてスキルに慣れさせるようにした。また、スキルを進んで活用できるよう授業の内容に合わせて表現の種類を増やしたり、スキルを使えるような場面を多く設定したりした。児童は、繰り返し練習することで技能を身に付け、自分の言いたい表現が使える経験を重ねるうちに、自信をもって英語でコミュニケーションをとることができるようになった。

(2) 課題

ア ウォーミングアップ活動について

- ・簡単な英語を使った活動の種類が限られていた。同じ活動を繰り返し行う場合には、少しずつ変化を加えるなど工夫が必要である。
- ・授業の導入部分で活動を行ったことで、授業の展開部分の時間を制限せざるを得なくなった。各時の目標をきちんととらえた上で授業内容を精選する必要がある。
- ・児童は毎時間活動に楽しんで取り組んだが、盛り上がりすぎて、気持ちを切り替えて授業の展開部分に取り組むことが難しいことがあった。児童がスムーズに気持ちを切り替えられる授業展開を工夫することが必要である。

イ リアクションのスキルについて

- ・児童がリアクションのスキルの表現に慣れてくると、やりとりが単調になり児童が飽きる可能性があるので、授業内容に応じた表現を加えるなど、児童の状況に合わせた工夫が必要である。

7 まとめ

昨年、現在6年生の児童の外国語活動を担当していたが、本研究の検証授業ではどの児童にも昨年には見ることができなかった一面を見ることができた。それは、周りの目を気にしていた児童がのびのびと活動したり、自分の思いを素直に表現したりして英語でのコミュニケーションを楽しんでいる姿である。ウォーミングアップ活動とリアクションのスキルに取り組むことで、児童の間に「自分を受け入れてもらえる」という安心感が生まれ、自分の思いや考えを表現することへの抵抗感を少なくすることができ、コミュニケーションの楽しさを実感することができた。外国語活動で、このように英語で楽しくコミュニケーションをとった体験が、その後の一人一人の英語学習や日常生活において、意欲的に英語でコミュニケーションをとろうとする態度につながるよう、本研究での取組を継続して行っていきたい。

<引用文献>

- ※1 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 pp.7-9 (2008)
- ※2 佐藤文香「人と関わる意欲を育む小学校外国語活動ーグループ・アプローチの活動を取り入れた指導の工夫ー」神奈川県立総合教育センター『平成22年度神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 第9集』p.47(2011)
- ※3 松川好孝「積極的にコミュニケーションを図る児童の育成ー「タスク活動」と『つなぎ言葉』を取り入れた活動を通してー」那覇市立教育研究所『那覇市立教育研究所 平成23年度研究報告書』p.24(2011)

<参考文献>

- ・Ray L. Birdwhistell, *Kinesics and Context : Essays on Body Motion Communication*, University of Pennsylvania Press (1970)
- ・國分康孝『エンカウンターで学級が変わる グループ体験を生かした楽しい学級作り 小学校編』図書文化社 (1996)
- ・國分康孝『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集』図書文化社 (1996)
- ・野島一彦「グループ・アプローチ」『現代のエスプリ 385』至文堂 (1999)
- ・河村茂雄『グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム 小学校編』図書文化社 (2001)
- ・國分康孝『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 Part 2』図書文化社 (2001)
- ・八巻寛治『構成的グループエンカウンターミニエクササイズ集 56選 小学校版』明治図書 (2001)
- ・相馬誠一『学級の人間関係を育てる グループ・アプローチ』学事出版 (2006)
- ・河村茂雄・品田笑子・藤村一夫『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校低学年』図書文化社 (2007)
- ・河村茂雄・品田笑子・藤村一夫『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校中学年』図書文化社 (2007)
- ・卯城祐司・蛭田勲『平成20年改訂 小学校教育課程講座 外国語活動』ぎょうせい (2009)
- ・文部科学省『Hi, friends! 2』
- ・文部科学省『Hi, friends! 2 指導編』
- ・文部科学省 外国語活動 “Hi, friends!” 関連資料 年間指導計画 学習指導案 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm
- ・横浜市教育局 子どもの社会的スキル横浜プログラム 指導プログラム集 三訂版 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/plan-hoshin/yokohamaprogram-pdf/zentaiban.pdf>